

作文指導における叙述の基礎的研究

——野地潤家先生著『源平桃』を対象に——

中 瀧 正 堯

はじめに

『源平桃』（文化評論出版、昭46初版、昭47再版）のそれぞれの文章は、一行四〇字、二〇〜二一行になっている。その八〇〇字程度の文章が、一〇一編集録されている。

執筆期間は、一九六五年（昭40）七月下旬から一九六八年（昭43）一月下旬までの三年四か月である。多く書かれた年月は、日付にしたがうと、一九六六年（昭41）九月八〜二編▽、一九六五年（昭40）一二月八〜一編▽、一九六七年（昭42）八月八〜九編▽である。逆に、どの年も執筆のすくない月というのは、六月と七月とである。これらのことから、この種の文章を書かれる際の、先生の生活上の節目をおうかがいすることができる。

また、昭和40・12・31、昭和41・9・15の両日は、それぞれ五編書かれており、つねづね、胸中にか、実際にか、創作メモのようなものがある、時間が許せば、一気に書かれるのであろうと拝察される。

『源平桃』に、私どもは、大きく二つのことを学んでいくことができる。

一つは、△作文・文章の学習上の一つの実験▽（内容見本しおりの方法および成果、についてであり、いま一つは、△専攻・専門の精進から生まれてくる発露・余滴▽（3）としての、思想、についてである。——（ ）内の数字は、『源平桃』の作品番号を示す。以下同じ。

※一〇一編のうち、今回の考察対象としたものは、九七編である。手紙文形式をとっている「アカシヤの花ふみしだき」（55）、執筆日付が二度にわたっている「白雲悠々」（63）。「選者」（80）、祝い文としての「祝詞」（83）の四編を考察対象から割愛した。

一 題目と段落との関係

一編一編の平均段落数は、六段落弱である。四〇〇字づめの原稿用紙一枚に三段落程度ということになる。

一編の文章を、冒頭の段落、中の数段落、末尾の段落というふうに分けて、これらを題目との関係で見っていくと、つぎのように、八つの型が見わけられる。

A 題目→**冒頭**・**○**・**○**・**○**（1・57）△計二編▽

B 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (3・14・26・32・41・56・90) △計七編▽

C 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (38・42・60・78) △計四編▽

D 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (9・10・33・47・81・85・88・95・) △計八編▽

E 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (13・23・31・39・51・67・84) △計七編▽

F 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (2・5・12・16・17・27・35・36・48・49・50・62・65・66・70・72・74・77・79・86・87・93・94・100) △計二四編▽

G 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (4・6・7・8・11・18・19・20・21・22・24・25・28・29・30・34・37・40・43・44・45・46・52・53・54・58・59・61・64・68・69・71・73・75・76・82・89・91・92・96・97・98・99・101) △計四四編▽

H 題目 ↓ (冒頭) ・ (中) ・ (末尾) (15) △計一編▽

Aの型である「夏の花」(1)は、つぎのようになっている。

冒頭に、原民喜の『夏の花』の一節を引き、ついでに段落に、①
 ▲炎天下の広島に夏の花が色どりをそえるかぎり、そこに、原民喜
 の幻の詩碑は、現実のそれよりもっと鮮明に建立されていると思
 う。▽(傍線引用者、以下同じ。)とある。このあと、原民喜につ

いての思い出にうつって、人と人との出あい(それにとまらう相互の評価)の問題が叙される。

Bの型として、「指揮棒」(32)を例にとってみる。冒頭は、

② ヘルベルト・フォン・カラヤンの率いるベルリンフィルハーモニー交響楽団が広島を訪れた。昭和四一年(一九六六)四月二九日(金)のことである。

という段落である。つぎに、△ふとしたはずみに、白くほそい指揮棒は、カラヤン氏の右手を離れて、床上に落ちてしまった。▽ことが叙される。ついで、△演奏中に、指揮棒が指揮者の掌中から逃げだすことは、▽の段落、△第一楽章がすむと、メンバーのひとり指揮棒を拾い、▽の段落があつて、そのあとの三段落は、カラヤンの指揮ふりと署名とについて叙されている。

Cの型である「虹」(42)は、四つの段落から成っており、その第四段落は、つぎのとおりである。

③ わたくしも、札幌からの夜行のため、うとうとしがちであった。ふと目をさまして見ると、八郎潟の上に、淡く虹がかかっていた。一瞬あっと息をのんだ。「虹見れば、わが心おどる。」——これは、西欧の詩人の発想だけではない。すでに、幼少から自分のものでもある。八郎潟干拓地の朝空に、虹のかかっていることが、わたくしにはことごとくうれしく思われた。象潟の手前で、特急「白鳥」はにわか雨にあつた。それもよき偶然と言いたかった。

つまり、題目になっている「虹」は、この末尾の段落に登場する

のである。

Dの型の一例として、「東西南北」(85)の冒頭と末尾の段落を掲げてみる。

④ 高杉晋作が明日はどちらへ行くのかときかれ、「東西南北へ
出立仕り候。」とこたえたと、玖村敏雄教授が「日本教育史」
の時間に、なにかの話のついでで紹介された。そのことが妙に
印象に残っているのである。(冒頭の段落)

⑤ ——寒さのきびしい、きさらぎ二日、玖村敏雄先生は不帰
の客となられた。先生は、どこへ出立されたか。寂寥のみがの
こる。(末尾の段落)

題目に直接することばは、冒頭の段落の△「東西南北へ出立仕り
候。」△のみである。中の五つの段落は、玖村敏雄教授の講義、研
究、講演等のことが叙され、末尾の段落に△先生は、どこへ出立さ
れたか。▽の一文があって、中の叙述を受けつつ、冒頭とも照応す
るあざやかな結びになっている。しかも、この問いの一文は、やは
り△東西南北▽と考えざるをえない点で、題目につながっている。

Eの型の例に、「磐姫陵」(67)をあげてみると、これは、微
妙なところがある。

冒頭、⑥△磐姫陵に詣でた。▽とあり、同じ段落で、仁徳天皇の
皇后である磐姫の作と伝えられる「かくばかり」の歌が引かれ、つ
ぎの段落には、犬養孝博士の「万葉の旅△上▽」の一節が引かれて
いる。第三段落は、△この磐姫陵には、昨年(昭和四一年)とこと
じと、二回詣でた。昨年は雨で、ことしは晴れだった。▽に導かれ

て、△ことし▽の磐姫陵のできごと(へびの出現)が叙される。
そして、末尾の段落は、

⑦ 昨年は、雨の中で、「かくばかり」の歌を朗誦した。それは
金子金治郎先生のおすすめによるものだった。だが、黒松武蔵君
は、「万葉行」という連作の一つに、わずかながら音してい
とまなき雨に力をこめて詠はれ給ふ を加えていた。

となっている。△黒松武蔵君は、…連作の一つに、▽として紹介
された歌の中味は、「かくばかり」という歌と切り離せない関係に
あり、その意味でも、冒頭の、歌の引用と照応する。けれども、「磐
姫陵」という題目からして、△黒松武蔵君は、…加えていた。▽
に、私は、微妙な展開を見た。ただ、微妙なだけに、Gの型として
考えてよいかとも思う。

Fの型のもは、題目に直接するものが冒頭には出ないだけで、
冒頭は、「助走」の役割を担うものと言えよう。たとえば、「陥穽」
(93)の冒頭段落は、つぎのようなものである。

⑧ もう三〇年も前のことになる。四国のある岬の家で、一夏旧
制中学一年生A君の家庭教師をしたときのことだ。植物採集を
しなければならぬということで、Aとわたくしとは近くの小山
に登った。しかし、Aは植物採集には乗り気ではなく、ただあ
たりを散策するだけにおわってしまいそうだった。山の裏側か
ら、銅鉦の探掘をしている坑道を通して、表側へ出ようとAが
言いだし、わたくしはそれにしたがった。

この段階では、どのような話の展開になるのかは、予断を許さな

い。やがて、△現実の陥穽▽（＝廢坑になっていた奈落）の話を経て、第五段落では、

⑨ 現実の陥穽もさることながら、心の内側の陥穽はもっとおそろしい。それは急に足元をすくわれるというより、徐々に陥ちこむこともあって、一筋なわではいかぬ。

となつて、思惟が深められ、

⑩ あの一夏は、アンニユイ（倦怠感）をともなつた、岬の家でのAとの生活だったが、やまの胸部をくぐりぬけようとして、なにげなく遊びそうになつた、あの坑路の中の、陥穽、のこわさだけは、アンニユイなど吹きはらつてしまうものだった。と結ばれる。

Gの型は、最も多く、いま、その一例として、「風水害実記」(4)の全文を掲げる。

⑪ 明治二十九年（一八九六）九月、福知山大水害があつた。當時福知山惇明小学校訓導だつた芦田恵之助は、京都市に出向いて水害の惨状を訴え、義援金を募り、児童への学用品を求めて帰校した。福知山大水害のことは、芦田によつて「丙申水害実況」としてまとめられ、現在もなお惇明校に保存されているという。近代国語教育を育てた芦田恵之助のこの「水害実況」が、わが国近代綴り方の源泉となつた。生活綴り方の萌芽がここに見いだされるのである。

さかのほつて、長保五年（一〇〇三）八月二十八日（旧暦）つまり九月二十六日（伊勢湾台風のきたものこの日だ。）、大型の

風台風が京都を襲っている。紫式部はこの風台風をモデルにして、その恐怖におののいた体験をもとに「源氏物語」の「野分」の巻で、屋根がわらが吹き飛ぶほどの台風をいきいきと描き出している。これは気象学者久米庸孝氏が追求されたことだ。

「野分」の巻では、台風の見舞いに、さっそくかけつけた夕霧に向かつて、祖母の大宮が「ここのよはひに、まだ、かくさわがしき野分にこそ、あはざりつれ。」と、ただ、わななきながら言うのである。ついで地の文には、「大きな木の枝などの折るる音も、いとうたてあり。」とある。

今から三〇年も前の阪神風水害の実相も、諸種の報道のほか市役所などが中心になつて、ほう大な記録に克明にまとめられている。今日、映像などによつて、風水害の被害状況は、すぐさま伝えられるが、しかし、その場かぎりに消えてしまいやすい。甚大な被害に負けないで、力強く復旧・復興をはかつていくうえにも、そのための基礎作業として、徹底した「実状記録」を必要とすると思うがどうであらうか。それには、徹底した記録精神そのものを、まず取り戻さなくてはならぬのであるが。

「実状記録」というものが、事によつては、まずは復興・復旧のための基礎作業としても重要であり、同時に、それが、△近代綴り方の源泉▽△生活綴り方の萌芽▽ともなつたのであり、「文芸」としての展開もありうることを述べた文章である。

先生のご著書『作文指導論』（共文社、昭50）には、△芥川龍之介の震災に関する文章群▽を対象に、「言語表現における思考と創

造の関連」を追究したご論考がある。また、かつて、研究室で、「細雪」(谷崎潤一郎)の風水害の場面について、お話をおうかがいしたことがある。

Hの型は、ただ一例になった。これは、題目が、とくに文章の表面上に直接には出していないもので、全体を象徴的な題目で包んでいるものである。「今いずこ」(15)が、それにあたる。秦哲子さんというかたの詩を引いた中に、△小鳥の群いづこにか行く▽の句があり、それとの関連はあるが、文章全体は、それを問題にしているのではない。

以上のような八つの型をとおして、F型、G型、H型は、段落の進みゆき(——内容の展開)において安定度が高いのに対して、A型、E型の五つは、内容の展開がいっそう自在であり、想の発展・飛躍の味わいが認められるように思う。

二 「書き出し」の叙述

書き出しの型は、一〇通りに弁別できる。

A^⑫ 数学者岡潔博士と評論家小林秀雄氏との「対話 人間の建設」(昭和40年10月20日初刷、11月25日5刷、新潮社刊)を讀んでいたら、つぎのような一節に出会った。(13)

⑬ 八月五日(木)の日記に、つぎのように記している。(18)

⑭ こういう題で、佐藤春夫氏に、つぎのような作品がある。(20)

⑮ NHKテレビ小説「おはなはん」を視聴していたら、……

手をひいていっしょに走る場面があった。(53)

(この型に属するその他の作品——1・15・31・34・37・40・58・73・79・82・84・96) △計一六編▽

⑯や⑰のようなものも、広い意味の引用としてとらえたものである。⑱は、題目「昼の月」を直に受けためずらしい書きかたになっている。また、「夏の花」(1)は、いきなり引用から始められているのであるが、そのあと、すぐに△原民喜の「夏の花」の一節である。▽とあるところから、この型に入れている。「お祝い」(79)も、ほぼこれに近い。ただ、このほうは、要約引用になっている。ほかに、いきなり引用というのは、芭蕉の句△秋深き隣りはなをす人ぞ▽を引いた「個展」(86)がある。が、このばあいには、この句のあとの叙述が、⑳△基町北区の市営住宅に住むようになって、もう満二〇年になる。▽となっているところから、つぎのBの型に入れている。

B^⑰ 松永市出身の英文学者福原麟太郎氏が、自選隨筆集「野方閑居の記」をまとめられてから、ちょうど満一年になる。(3)

⑲ 四国の山村のわが生家の庭先には、巴旦杏の樹が三株もあった。(45)

⑳ 今まで収集した本をおさめておく書庫がほしいと思いはじめ、もう久しい。(51)

㉑ 秋篠寺には、今までに三回詣でた。(68)

右のように、文末を、時・数・回数などでおさめている書き出しである。(この型に属するその他の作品——76・86・87・89) △計

八編▽

C ① 旧広島文理科大学の付属図書館は、原爆で焼失してしまつて、今ではもうしのおよすがもなくなつた。(49)

② 小学校六年のとき教えていただいたのは、味村実先生であつた。(74)

③ 小学校四年生のときの担任は、小泉(のち、宮田)茂穂先生といつた。(98)

④ 四國の山村に育つたわたくしには、りんごとバナナとは、子どものときから、……あこがれのくだものだつた。(75)

⑤ 東京文学院講本・全六巻は、……文学入門書であつた。(99)

「なにになには、……どうなつた・だれであつた・なにになにだつた。」という文型が認められる。すなわち、回想の書き出しである。

△計五編▽

D ⑥ ことしも、論文、越冬隊の季節になつた。(10)

⑦ 北海道旭川市に着いて、駅に降り立つたときは、……残暑のけはいがつよかつた。(41)

⑧ 清水文雄先生に導かれて、権司ヶ谷の墓地に着いたのは、もうたそがれであつた。(46)

⑨ 大津での宿、「ささなみ荘」は、沈丁花のさかりだつた。(70)

すでに、「時」の文末は、Bにあつた。Bの「時」が、時の経過を述べているのに対し、ここでは、その場でのその「時」のようす

が叙されているものと見た。△計四編▽

E ⑩ 昭和四一年一月二五日、広島市の内にも、久しぶりに雪が降つた。(24)

⑪ 桂園井上政雄先生のご退官記念の謝恩送別会が、……行なわれた。(26)

⑫ 昭和二〇年(一九四五)一月はじめ、わたくしは……、仙台の陸軍飛行学校にはいることになつた。(38)

⑬ 師走もおしつまつた二五日に、……W君夫妻から、寄せがきが届けられた。(56)

ここでは、なんらかのできごと・催しなどの書き出しをとらえることができる。(この型に属するその他の作品——4・28・33・59・88・92・97・100) △計一二編▽

F ⑭ 読書による人格形成のありさまは、年輪を密にもつた樹木の繁茂していくすがたにもたとえられよう。(23)

⑮ 広島市に言語障害児・難聴児を守る会が結成され、……というニュースには、大きい期待がよせられる。(8)

⑯ 国語科の授業の導入は、……いろいろなふうされる。(91)

なんらかの判断・考察から書き出されるばあいである。(この型に属するその他の作品——19・43・61・71)

⑰ 私鉄・国鉄などに行なわれてきた「顔パス」が全廃されようとしてゐる。(7)

⑱ 高校生の学力のことが問題となつてゐる。(9)

る。

以下には、「時」に関する起筆例を、すべて掲げる。

- (1) ①今まで(51)
- (2) 近代における(71)
- (3) ⑧もう三〇年も前の(93)
- (4) ②小学校六年のとき(74)
- (5) ③小学校四年生のときの(98)
- (6) 小学校三年生(昭和四年)の初夏(97)
- (7) ある年の夏(12)
- (8) 炎暑下の(95)
- (9) 晩秋のある日(101)
- (10) ④あれは「東洋倫理」の時間であつたらうか。(25)
- (11) ⑤ことしも、論文、越冬隊の季節に(10)
- (12) 毎年三月もなかげになると(28)
- (13) ④初冬の一夜(昭和四〇年二月四日)(11)
- (14) 昭和四〇年二月(16)
- (15) ①明治二九年(一八九六)九月(4)
- (16) ③昭和二〇年(一九四五)一月はじめ(38)
- (17) ことし(昭和四二年)七月(72)
- (18) 昨年(昭和四二年)八月一七日(94)
- (19) 昨年(昭和四一年)秋の十一月三日の(58)
- (20) ③昭和四一年一月二五日(24)
- (21) 昭和四二年(一九六七)八月五日(73)
- (22) 昭和四一年(一九六六)一〇月二日、秋晴れの午後(47)

② 一九六一年(昭和三六年)八月(36)

④ 一九六五年(昭和四〇)大みそかの(21)

⑤ ④一九六六年七月二六日(火)、午後五時半(44)

⑥ 六月末(88)

⑦ 一二月三日(17)

⑧ 四月一日(66)

⑨ ③八月五日(木)の(18)

⑩ 三月二四日(木)の(31)

⑪ ③師走もおしつまつた二五日に(56)

以上が、「時」に関する起筆の三一例である。このうち、⑧、⑨、⑩が同形であり、他は、それぞれどこかちがっている。これは、おどろくほどである。

ところで、「場」や「人」に関する起筆のばあいでも、そのあとに、たえず「時」は示されている(②④⑥⑧⑨⑩⑪など参照)。このことは、先に、一の「題目と段落との関係」のところ、その全文を引いた「風水害実記」(4)の中の△徹底した記録精神▽に基づいていると、私には思われる。じつに、「源平桃」の一〇一編の中には、記録なくしては書きえないと思われるものがすくなくない。

三 「結び」の叙述

結びについては、特徴的なことからをとりあげてみたい。

A 「か」をとまなうもの。

⑫ 三〇年後、秦さんの胸中はいかがであらうか。(15)

C ダッシュ「——」をとともなうもの。

さきに、A Bでは、ダッシュのあるなしを問題にしなかった。ここでは、ダッシュをとまなっていることのみを問題にすると、つきのようになる。

⑤③ ——北海道へ来た、一つのかいがあったといくらかうきうきしながら、わたくしは札幌市内の本屋めぐりをしていったのである。(43)

このように、末尾の段落の頭に、ダッシュを置いたものは、そのほかに、(50・51・66・68・79・82・85) 八文例⑤参照V・92・97) がある。八計一〇編V

⑤④ のように、終筆のためにダッシュを用いたものは、(1) 八文例⑤参照V・11) 八文例⑥参照V・45・49・62・69・81・84・86・89・100) の八計一編Vである。

⑤⑤ いくらか非情な裏がえしの親愛感——そういうものが「いたずら」から感じられるようにも思ったのである。(35)

⑤⑥ 原爆ドームとなって、彼はわたくしから遠のいてしまった。そして、それは象徴になってしまった。象徴以前のドームに、わたくしは学生時代の親愛なるおもいを抱いているのである。「原爆ドームよみがえる」——わたくしには二重によみがえるものがあつた。(73)

⑤⑦ は、引用文(句)につづくダッシュである。⑤⑧ は、筆者の判断・考察につづくダッシュである。これには、一種引用句のように、判断・考察をくっきりと印象づけるはたらきがある。⑤⑨ の型は、そのほかに、(40・42) 八文例③参照V・94) がある。以上八計五編V。

以上のほかに、末尾の段落内において、八もちろん、大田先生の選だった——。V(74)、八「月」にも、「十字」にも、「花」にも、——美を真剣に追求するひとのきびしさどゆたかさどがあつた。V(86) などのダッシュの用法が見られる。

D 止めの一句

⑤⑩ そのリンカーンの首(顔)のりっぱだったことをたたえ、ぜひ生前に会いたかつたと述べたのは、彫刻家・詩人の高村光太郎だった。氏は言う、「電車のなかであまりよい首の人に偶然あうと、別れるの心が残る。思いきって話しかけようかと思うことがたびたびある。女の人などは一生に二十日間ぐらいしかあるまいと思うようなとくに美しい期間がある。それをむざむざとすこさせてしまうのが惜しい。」と。秋も深い。(7)

この一句(文法的には一文)の前後には、ダッシュに相当する八間Vが感じられる。その八間Vに、それまでの叙述が収束し、一句は、点晴の役割を果たす。右のばあいは、引用文中の女の人などの美しく見える期間と八秋Vとが、さわやかな照応を示してもいよう。

こうした止めの一句を持つ作品として、そのほかに、(10・21・69・85) 八文例⑤参照V) などをおげることができる。八計五編V

⑤⑪ 雪道を降りながら目撃したことは、いずれもゆきずりの子どもたちに関することだった。それらは、いかにも雪の白らしいことだった。(24)

八いかにもVの叙述については後述するが、その多用は、「城の

崎にて」(志賀直哉)の「蜂」の部分に見られる——このことが、この「雪の日」(24)の一読以来、いつ読んでも想起されるので、書きとめておきたい。この止めの一句に近いものに、もう一つ、「墓参」(46)の△それは応答のようにもひびいた。▽がある。△計二編▽

⑩ 校長室で、「芳名録」に署名をもとめられた。明治末年以降、知名の士が多く来校していることもわかった。わたくしは、署名して、おしまいに即吟を添えた。

櫻ふりてかの白雲悠々をなつかしむ(72)

おわりを韻文のみで止めた作品は、この一編だけである。「磐姫陵」(67)が、これに準じ、見かたをかえれば、「石山寺」(69)の△「ヒト バカリ ヤンカ？」▽も、文章の呼吸としては、近いものがあるうか。

「結び」の叙述について、特徴的なことからして述べたかったことを、まとめて言えば、△余韻▽ということになると思う。

△文章の呼吸▽の二つは、「結び」の叙述には、かゝることができると思う。先生のはあい、それが短歌の道からつながってきているのではないか。

四 「負性否定」および「比喩・象徴」の叙述

ここに、「負性否定」というのは、つぎのような叙述をいう。

⑩ わたくしたちは、自己の評価を相手が第三者にしているのを、つい知る機会があって、その思いがけぬ冷酷な評価に、衝撃を

受けることがよくある。そういうとき、日常の儀礼的なことばでは決して見られぬ、きびしさ、またやりきれなさをいやといふほど感じないではいられない。(1)

○それは単なる演技だけではかたづけられぬものをもっている。(1)

⑪ ここには、当時の女学生の一片の感傷とのみ切りすてられないものもあるのではないか。(15)

○しかし、その稀有なことも、「運命」という曲の力に溢れだした進行の中では、不吉や凶の感じを与えるものではなかつた。(32)

○先生の天然ウェーブは、かりそめのものではなかつたのである。(65)

○芭蕉のいう「殊勝の土地也」とは、通りいっぺんのことばでない、わかつたのであつた。(69)

⑫ 随筆は、単なる閑文字ではなくて、それは精神のスポーツともいえる。(3)

○しかし、それは弱みにつけこむというのではなく、(5)

○対外的な顔の広さを悪用するところではなく、(7)

○相手に不審感を抱かせる無意味な笑いではなく、(16)

○相手を揶揄したり、皮肉ったりするやりかたでなく、(21)

○その年輪は、袋小路ではなく、(23)

○それは、負け惜しみの強がりではなくて、(25)

○単に、平板に意味するところをそのつながり・まとまりとして受けとめるだけでなく、(37)

○新郎を苦境に立たせる悪意ではなく、(62)

④ これらの作者の「サザエさん」・「アッチャン」以外の漫画を見て、さほどに感心しないのは、どうしてだろう。まさか手を抜いているのであるまいが、登場人物へのなじみが少ないからということか。(19)

負性の否定は、ともすればそう見がちな、ややもすればそう思いがちな、皮相のこととして受けとめがちなものへの警告的表現である。その中において、④のような表現形態は、違まわしの批判になるはあいがある。

負性の否定は、慎重に、的確にとの叙述態度からみちびかれるものようである。

「比喩・象徴」の叙述を、まず、すでに掲げた④までの文例からとりあげてみる。

文例③に、△象潟の手前で、特急「白鳥」は、にわか雨にあって。それもよき偶然と言いたかった。▽とある。△特急「白鳥」は、▽の擬人法はもちろんだが、にわか雨がよき偶然というのは、いわゆる「引喩」であろう。『奥の細道』の「象潟や雨に西施がねぶの花」を受けている。

ほかに、文例⑨の△心の内側の陥穽▽ (93)、文例⑩の△読書による人格形成のありさま▽を、△年輪を密にもった樹木の繁茂していくすがた▽にたとえること (23)、文例⑪の△はかりえぬ深淵のようである▽ (1)、文例⑫の△いくらか非情な裏がえしの親愛感▽ (35)、文例⑬の△精神のスポーツ▽ (3) などがあげられる。

さらに、「比喩・象徴」にかかわる叙述をあらたに一一例選び出してみる。

⑮ …… 双脚を徐々に挙げきって、一種祈念するようなポーズをとるのは、東京オリンピックの競技にも示された印象深いものであった。(16)

⑯ …… 「いたずら」をまにうけて、烈火のように怒るのも興ざめなものであるが、わたくしは、一種おとし穴に足を入れたような感じだった。(35)

⑰ …… 乗り換えにわずらわされぬ、つかの間の断唱のような風景だった。(44)

⑱ …… まさに豊饒なみのりをみせる稲田は、いま新しく編まれた月見草色の花むしろのようだった。(47)

⑲ …… 刺したなという敵意よりも、(蜂に——引用者注) 刺されることによって初めてなにかがうばわれてしまうようなくやしさがつよかった。(97)

この五例をもってしても、比喩が、視覚・聴覚のほかに、深く人間の精神にかかわっていることが了解される。

⑳ …… この詩によまれた山野を、青春のある時期に見知っているだけに、その感傷のみなかに、なつかしさを感ずる。(15)

㉑ …… 源平桃の花枝のみごとさに接すると、失われた日のゆたかさがよみがえってくるようだ。(28)

㉒ 新しい首途にある二人によって旅先から送られてくるはがき …… 読む者の胸に、ういういしい光の射しこんでくることが多い。(56)

⑦ ……。もしかすると、伎芸天の精霊は、この馬酔木の花と
咲き匂っているのではないか。(68)

⑧ 「悪」とはなにか。つかみにくい面を持っているが、それは
濁世の濁世たる渦巻きそのものといつてよい。(94)

ここには、具体的なものから抽象的なものへ、抽象的なものから
具体的なものへの行き交いが見られる。情緒・思惟の深まりは、通
常、前者の形態をとると思われる。後者は、⑨の「伎芸天の精霊」
(抽象的なもの)から「馬酔木の花」(具体的なもの)へという叙
述になって、これがいわゆる「象徴」である。

「比喩・象徴」の叙述も、対象をよりの確に、鮮明にとらえよう
とするいとなみの表れである。たとえば、「いたすら」という行為
(叙述対象)の本質が究明されて、⑩「いたすら」を媒介にした、
それを花火のようにしかけていく、舌たらずな人間関係」というふ
うに、叙述がきりきりとしぼられていく。

五 ことば選び

分析の過程で焦点化されてきた視点は、

- 1 「感じる・思う」の叙述
 - 2 「ふと」および「いかにも」の叙述
 - 3 「しずかさ」および「あざやかさ」の叙述
- の三つであった。

1

「感じる・思う」の叙述は、簡明に整理することができない、複
雑多様な形態を見せている。それは、そのまま、その折の抒情・思

惟のこまやかさとしなやかさを示すものと言える。

ここでは、まず、助動詞「ようだ」と動詞「感じる・思う」との
結合およびそれに準じる形態について見ていく。

- (1) 作者の調子のいいときは、そのように感じられる。(19)
- (2) 対話とは、こうあって初めて対話に値するといふ感じもした。
(17)

(3) 人間というものを見つめている作家として、たえず胸底にあ
ることがことばとなって出てきたような感じだった。(94)

(4) —そのときの、足音がなお残っているかの感がしきりとす
る。(73)

(5) ……にならって、随筆王国、と呼びたいような気がす
る。(3)

(6) その話しぶりもまた、読みぶりと寸分ちがわないう気が
する。(11)

(7) ……を、じかに感じとり、味わい深めることをえたように
思った。(50)

(8) ……と知って、それこそ叙勲以上の贈物のように、わたく
しには思えた。(58)

(9) ……見ていくうち、「お経」というものに、あたらしいな
にかが汲みとれるように思えてきた。(14)

このうち、(7)の叙述形態は、△ようにも思う▽△ように思われる▽
△ようにも思われる▽△ように思うことがある▽というふう
に、微妙に変化する。

つぎに、「感じる・思う」の動詞表現のうち、 \wedge 心 \vee \wedge 胸 \vee \wedge 目 \vee \wedge 耳 \vee を使ったものをおさえてみる。

(1) いつまでも心に刻まれていくにちがいない。(70)

(2) このお話は心にしみ入るようであった。(98)

(3) わたくしの心に残った。(79)

(4) 一つ一つ心にひびくものがある。(14)

(5) それぞれに心にふれてくることばであった。(94) ○わた

くしの心にふれる。(99)

(6) ……叙述に、心ひかれていたのであったが。(14)

(7) それは、いっぺんでわたくしの心をとらえてしまった。(74)

(8) 歴史絵はがきのくふうに、わたくしは心をひかれた。(5)

○(31)

(9) ……のあざやかさは、心をよるこぼせはするが。(44)

(10) ———わたくしは、胸にある充実感を抱いて、秋篠寺をあとにした。(68)

(11) 生涯を通じて、折にふれては、胸に新しく思いおこしうることばがあるということば。(25)

(12) ……ということの「せつなさ」が胸にきた。(38)

(13) 読む者の胸にういういしい光の射しこんでくることが多い。

(56)

(14) ……母のさびしさが、わたくしの胸につきささるようだった。(100)

(15) 椽の突の風を受けて落下し、流れていく有様が目に浮かぶようである。(34) ○(60) (90)

(16) 紅白あい応じて、……後学の者の眼にしみた。(46)

(17) 真紅冷然、目に沁み入るようだった。(54)

(18) ……見ていたら、つぎのような詩二つが目にとまった。(15)

(15)

(19) ……と広告の出ているのが目を射た。(41)

(20) ……ねむの木々が並んでいて、目をたのしませた。(87)

(21) その姿がまぶたにやきつけられた。(49)

(22) 思いがけない暗誦だっただけに、わたくしの耳には、ことに

あざやかに響いた。(77)

かつて強く感じられて、現在もなおというばあいは、 \wedge いまに \vee

\wedge 今も \vee をともなつて、 \wedge 眼底に \vee \wedge 眼のうちに \vee \wedge 胸底に \vee \wedge 胸

の奥に \vee \wedge 耳底に \vee \wedge 脳裡(裏)に \vee ある、と叙述されることが多

い。

以上、「感じる・思う」の叙述について、二つの事例をあげて、

その複雑多様な形態の一端を見た。「感じる・思う」の叙述を洗練

していかなくは、随想・はゆたかなものにならないことを教え

られる。

2

「ふと」の叙述とは、 \wedge ふと \vee \wedge ふとしたこと \vee \wedge ふとしたはずみに \vee \wedge 思いがけぬ \vee \wedge 思いもつけぬ \vee \wedge 思いのほかに \vee \wedge 案外に \vee \wedge 意外なことに \vee \wedge 不意の \vee \wedge 予期しないこと \vee などの叙述群を指し、関連しては、 \wedge そのとたん \vee \wedge 一瞬 \vee \wedge たまたま \vee などをふくむ叙述相を見ようとするものである。

右に述べた叙述のみを手がかりにすると、そうしたある種の驚きをあつかった作品は、二六編になる。△ふと▽の世界が叙述を促す、というふうに認めてよいかと思う。

ここでは、もはや文例をあげないことにするが、既出のものでは、文例⑧⑨に、その一端をうかがうことができよう。

一方、「いかにも」の叙述とは、「ふと」とは反対に、それらしまゝや、自然の世界のことであつて、△いかにも▽△まさに▽△ふさわしい▽△似つかわしい▽△しぜんに▽などの叙述群を指す。

右に述べた叙述のみを手がかりにすると、そうした、あるがまま、のしぜんさをあつかった作品は、一九編数えることができる。既出のものでは、文例⑩が、その一つである。

以上、「ふと」および「いかにも」の叙述を、ことばを手がかりにして、その作品数を見た。(そのうち、六編が、両者を併存している。)ことはそのものとしては、直接出てこないとしても、作品が、「ある種の驚き」にもとづき、あるいは、「あるがまま」のしぜんさ」を問題にすることも予想される。

私は、いま、この「ふと」と「いかにも」とを起伏・振幅として、叙述の根基を見定めようとする。日常という地平線にあつて、「ふと」と見いだし、「いかにも」とうなずくことが叙述するということの根基なのではないか。しかも、叙述の根基としての態度と叙述そのものとは、ほとんど、その差が認められないように思う。

この次元での「ことば選び」とは、「ふと」とするか、「ふいに」

とするかといった「ことば選び」よりも(一それもだいたいなことではあるが)、対象を把握するおびただしい語群の中から、「ある種の驚き」に密接する「ふと」の語群を選びとることを意味する。

3

「しずかさ」につらなる叙述は、一九編に見られる。△静かで▽△静かに▽△静閑の▽△静かな▽△ひっそりと▽△しずまって▽△静かさ▽△閑静さ▽△ものしずかな▽△静もって▽などの叙述群である。

ついで、「きよからかさ・すがすがしさ・さわやかさ」につらなる叙述は、△すがすがしい▽△清らかさ▽△清爽さ▽△清らかな▽△さうらうとして▽△さわやかに▽△澄んだ▽△清らかな▽など、一二編に見られる。

「うららかなさ・あかるさ・かがやき」につらなる叙述は、△うららかな▽△かがやき▽△明るかった▽など、七編に見られる。この中には、△天性のかがやき▽ (21)などをふくんでいる。

「新鮮さ」につらなる叙述は、六編にある。

「あざやかさ」につらなる叙述は、△あざやかさ▽△あざやかな▽△鮮烈さ▽△くっきりと▽△鮮明に▽△あざやかに▽△あざやかで▽△鮮明さ▽などの叙述群で、一三編に認められる。

形容詞・形容動詞を中心としたこれらのことばは、対象をどうとらえる(た)かを決定するものであろう。と同時に、それは、筆者の胸奥に、そういう対象をもとめるもののあることを示している。

「静かだ」とするものは、そう言われれば、ほぼだれしもが、そ

れを認めるであろう。

が、それを「静かだ」と叙述するかしないかは、表現者の内的生活に支えられているのである。「あざやかさ」にひかれ、「しずかさ」を愛する内的生活が、対象の「あざやかさ」「しずかさ」を把握し、叙述に至らしめる。

したがって、ここでの「ことば選び」もまた、「静かで」とするか、「ひっそりとして」とするかということよりも、対象の模様・状況を示す数多くの語群の中から、右に掲げた「しずかさ」以下の語群を選びとることを意味する。その選びとられたことばこそが、筆者の、思想の叙述にはかななるまい。

おわりに

昭和四六年七月一二日(月)に、口頭発表による最初の考察をさせていただいた。そのときは、「取材」の側面については、動物題材がすくなく、植物(花樹)への関心が高いこと(二七編)、「感覺のはたらき」については、視覚・聴覚に冴えが見られ、嗅覚・味覚・触覚は数少ないことを報告している。

また、「叙述」面の形容詞・形容動詞・副詞については、今回とりあげたもののほかに、「なつかしい」「ゆたかだ」「いきいきと」などに注目している。

それにしても、最初の考察から、もはや九年の歳月が流れようとしている。その後に、あらためて考察のおゆるしをいただいてからも、五年くらいにはしまいか。

長い間のおゆるしに深謝申しあげるとともに、『源平桃』のゆた

かさに比してはつたない考察の、つづいてのおゆるしをいただかな
くてはならない。

(鳥取大学教育学部助教授)